第 137 号

令和６年７月１９日発行

可 児 市 教 育 委 員 会

可児市教育研究所

可児市広見１丁目５番地

TEL(0574)63－4841

e-mail :kyoikukenkyu@city.kani.lg.jp

笑顔の“もと”

エピソードを語り合いましょう!

可児市　教育長　　堀部　好彦

今年の学校訪問も各校の先生方や子どもたちの素晴らしい姿に心躍る日々でした。訪問した小学校で伺ったエピソードを紹介します。

放課後、先生が教室の掃除をしている時、「先生、私もやります！」と掃除を手伝ってくれた子がいました。理由は以前手伝った子が紹介されていたので自分もやろうと思ったから、とのこと。

先生、嬉しかったでしょうね。後日、学級朝の会で、この子の姿を「人の素晴らしい姿を自分に生かそうとする」「自分の時間をみんなの教室のために使おうとする」などの視点から価値付けられたのです。よい言動のねうちを多様な視点から捉え、本人だけでなく学級の仲間にも的確に教えておられました。とても素敵な指導ですね。

さらに、教頭先生がたよりでこの事実を教職員に伝えられました。価値付けた「人の素晴らしい姿を自分に生かそうとする」などの資質・能力、これがすなわち未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」なのですと語る教頭だよりに、胸が熱くなりました。

笑顔の学校づくり 第２ステージ。各校で校長先生のご指導の下、自校の「笑顔の“もと”」について共通理解が図られ、特色ある教育活動が展開されています。それらの実践は、「笑顔の学校」公表会で共有され、協働学習や児童会、生徒会の活動の工夫等について学び合いが始まりました。

市内中学２年生の美術科の授業では「笑顔の“もと”」ロゴマークが取り上げられ、可児市の教育を象徴するロゴマークが創られました。「笑顔の“もと”」プログラムなる指導資料により、アーラと連携したココロとカラダワークショップと同様、コミュニケーション能力等非認知能力の育成にも取り組んでいます。

幼保小の連携においては、幼児教育「10 の姿」を踏まえ「笑顔の“もと”」を位置付けた接続期カリキュラムが作成され、各校に広められつつあります。給食センターでは「がんばれ かにっこ！給食」、あのロゴマークがプリントされたメンチカツも提供されました。

そしてこの夏、市役所秘書政策課が可児市児童生徒科学作品展・社会科作品展に参入。可児市のことを調べた作品の中から「スマイル輝き大賞」贈呈を計画しています。さらに秋には、可児川苑に新たな教育支援センターがオープン。不登校対策がさらに充実します。

秀逸な取組の数々に心から感謝しています。これらの取組が、冒頭の小学校のような営みを生んでいるのではないでしょうか。

よい言動を的確に価値付けるとともに、その事実を教職員や保護者等に伝えることは、「笑顔の“もと”」の自覚を高め、その理念やねうちを広めることにつながります。そして、その過程で教職員、保護者等が「笑顔の“もと”」のエピソードを語り合う、これが教育観に磨きをかけることになるのです。

今年、教育委員会表彰に「笑顔の“もと”」奨励賞を新たに設けます。豊かなエピソードを語り合う表彰式にしたいと思っています。

可児市の外国籍児童生徒の現状

「みんな　かにっこ」

～未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」を育む～

令和６年６月１日現在、可児市の外国籍児童生徒数は８６６人で、全児童生徒数の１１％を占めています。可児市の住民人口の数が減少にある中、外国籍住民人口と共に、外国籍児童生徒数は毎月増加傾向にあるのが現状です。

教育委員会の窓口には毎日と言っていいほど、就学の手続きに来られます。その中心は、これまで同様、フィリピンやブラジルからの子どもたちが多いです。しかし、来日が初めての児童生徒のみならず、再来日の児童生徒も増えています。他市町からの転入や日本国籍ですが来日は初めての児童生徒、ベトナム等からの編入など、その内情は様々です。可児市教育委員会の就学手続きで大切にしていることは、就学手続きをする児童生徒の「これまで」、つまりバックグランドを丁寧に確認することです。周知の通り、可児市には、ばら教室 KA NI（以下、ばら教室）があります。このばら教室は、原則、初めて日本の学校に通う児童生徒を対象としています。就学手続きをする際、学籍がある学校からスタートをするのか、それともばら教室からスタートするのかという選択になります。その場合、先述した原則は大切にしながらも、その児童生徒、そして保護者とも面談をし、どちらからスタートするのがその子の将来にとってより良いのかを判断します。

以前、次のような生徒がいました。小学校１年生に日本の学校に通い、その後フィリピンに帰国し、６年ぶりに来日した中学生です。この生徒は、過去に日本の学校に通った経緯はあるのですが、その頃に学んだ日本語はほぼ覚えていないのが現状でした。家庭の事情で自分だけフィリピンに帰国しなければいけない状況が続き、６年ぶりに母親と一緒に暮らすことが可能となり、再来日しました。私がこの生徒と面談をした際、彼は片言の日本語と英語で語りました。「これまでお母さんと一緒に暮らすことができなくてとても寂しかった。でも、お母さんは遠い日本で、僕のために一生懸命働いてくれている。今、日本に来られてお母さんと一緒に暮らすことができてとても嬉しい。僕は、日本で一生懸命勉強して、航海士になりたい。そしてお母さんを幸せにしたい。」

この生徒は、ばら教室から日本での学びをスタートさせ、今も一生懸命、日本語の学習等に励んでいます。

〈ばら教室での学習の様子〉

また、就学する児童生徒の中には自分はなぜ日本にいるのか、なぜ日本語を学ばなければいけないのか理解できない児童生徒も少なくありません。彼ら彼女らが日本に来る理由は、家庭（保護者）の事情であり、自分が望んでいることではないです。だからこそ、その生活をスタートさせるばら教室は、「どの子も安心して『自分をつくる』居場所」であることをその役割としています。ばら教室に入室するどの子も、「笑顔」で「あきらめない心」を持ち続けられるように指導や支援をします。そして、日本で生きていくための「自信」と「覚悟」をもって、学校に戻っていくことができるように指導・支援しています。そのばら教室では、およそ４ヶ月の学習を終える修了式で、どの子も日本語でスピーチをします。私はそのスピーチの中で「やっと、ここまできた」と語った中学３年生の言葉がとても印象的です。彼女も現在、自分の進路を叶えるために中学校で元気に頑張っています。

可児市教育委員会では、可児市の小中学校で学ぶどの子にも未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」を育むことができるように取り組んでいきます。

（教育委員会　学校教育課　佐合　佑介）

幼保小の架け橋プログラム事業

「笑顔の“もと”」で「つなぐ・高める・支える」幼保小の連携

～可児市「笑顔の“もと”」接続期カリキュラム～

教育は子ども一人ひとりの発達や学びの連続性を見通して行われるものですが、中でも義務教育開始前後の５歳児（年長児）から小学１年生の２年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために非常に重要な時期です。園から小学校へと大きく環境が変わる、この接続期のことを「架け橋期」と呼びます。

架け橋期は、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校という多様な施設がそれぞれの役割を担っています。教育課程の構成や指導方法等、様々な違いが存在していますが、子どもの成長を切れ目なく支える観点から、幼保小の円滑な接続をより一層意識し、立場の違いを越えて連携・協働し、全ての子どもに学びや生活の基盤を育む主体的・対話的で深い学びの実現を目指すのが「幼保小の架け橋プログラム」です。

可児市は岐阜県の指定を受け、令和４～６年度、東明小学校と４つの園が連携して「幼保小の連携・協働による『つなぐ・高める・支える』架け橋プログラムの開発・実践」に取り組んでいます。園は可児市立の瀬田幼稚園、久々利保育園、私立のトキワ幼稚園、認定こども園ひろみ保育園すくすくの４園で、園の規模やカリキュラム、園児の就学先などは様々です。それぞれの違いを活かしながら、円滑に教育をつなぐために、東明小の「笑顔の“もと”」である「すすんで・仲間と・おわりまで」を「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」と照らし合わせ、「協同性」を重点に据えて接続期カリキュラムを作成しました。

カリキュラムの開発にあたって、可児市立幼保園で活用されている接続期カリキュラムをベースに、「協同性」に関わる各園の取り組みや行事・学校の教育活動について記載し、架け橋期を見通せるようにしました。カリキュラムの開発協議会以外にも、東明小の職員研修会に園の先生方が参加したり、公開保育の様子を小学校の先生が参観したりすることで、つながりや理解をさらに深め、互いの保育・教育に生かしていただいています。

【R6 年度幼保小連携協議会（東明小）の様子】

６～７月には、各小学校で幼保小連携協議会が開催され、１年生の先生方を中心に園の先生方と意見交流をしていただきました。「園からの要録やサポートシートが個の具体的な支援に役立っています。」「園での経験を学習につないでいます。」といった先生方の声に、園の先生方も「丁寧な指導を積み重ねてくださり、成長を感じました。」と安心された様子でした。

気を付けなければならないのは、幼保小の連携とは、幼児教育と小学校教育の双方向から橋を架けるものだということです。つまり、「入学までにここまでできるようにしてきてくださいね。」という一方的な小学校教育の前倒しではないということです。どの園からどの小学校に就学しても、園で養われたその子らしさを発揮し、生き生きと小学校生活が送れるように、子どもの育ちに関わる大人が立場の違いについて理解し、一人一人の多様性に配慮しながら、役割を果たすことが大切です。

今年度より「幼保小中連携研修」として、園内研究会や全研、職員研修等の情報を研究所でとりまとめ、互いに参加し合えるように情報を共有しています。普段見る機会の少ない保育の様子や園児の姿から学び得るものは非常に大きいと思います。ぜひ積極的にご活用ください。

（可児市教育研究所　脇田　知里）

学校所員会の今年度の活動について

●学校所員会

＜テーマ＞
「笑顔の“もと”」を育む授業の創造～効果的なICTの利活用による協働学習の充実を通して～」

＜研修計画＞

回	月日	内　　容
1	5 / 17	＜研修＞ 今年度の研究推進について
2	6 / 20	＜研修＞ 「協働学習における ICT の利活用について」 講師：鈴木明浩先生(岐阜聖徳学園大学)
3	8 / 22	＜授業研究構想の交流＞ 「笑顔の“もと”」を育む授業づくりの交流
4	9～12月	＜授業実践・研究会＞ ３つのグループに分かれての授業参観・研究会
各学校で		学校所員の校内実践発表（学校公表会で位置づける）
5	1 / 18	＜実践発表・次年度への展望＞ 実践交流、次年度に向けて

＜メンバー＞（敬称略）

学校名	氏　名	学校名	氏　名
今渡南小	豊田　拓也	桜ケ丘小	市川　苗己
土田小	中村　涼雅	今渡北小	肥田　智成
帷子小	山田　真央	兼山小	入澤　拓摩
春里小	八橋　久美子	蘇南中	鈴木　涼
旭小	伊藤　実希子	中部中	松葉　祐太
東明小	奥西　久仁子	西可児中	星山　康博
広見小	曽我　昂平	東可児中	林　亮太
南帷子小	山本　夢佐士	広陵中	今井　寛之

小学校グループ２つと中学校グループ１つの計３つのグループを作り、研究を進めていきます。

学校所員会では、テーマにある通り、それぞれの学校で設定されている「笑顔の“もと”」を、授業を通して育むことを目指します。授業において、「笑顔の“もと”」を育んでいる子どもの姿を描き、その姿に迫るための手立てについて研究を進めていきます。

目指す「笑顔の“もと”」は学校によって異なりますが、共通の方針としてICTの利活用を通して協働学習を充実させることを副テーマに設けました。それは、令和５年度の全国学力学習状況調査における質問紙調査の結果から、授業におけるタブレットの利用の頻度が全国比で低く、令和４年度よりも下がっていることが分かり、ＩＣＴの利活用に授業改善の余地があると考えたからです。ＩＣＴの利活用がドリル等の個の学習にとどまらず、協働学習を充実させるものになる授業の形を提示できるよう、研究を進めていきます。

第２回の所員会では、講師としてお招きした、岐阜聖徳学園大学の鈴木先生より、協働学習における ICT の利活について研修を受けました。

「協働学習の良さを子どもが理解することが大切であること」「協働学習であっても、最終的には学びは個に帰ること」「ＩＣＴに関わっては、実践し始めると様々なことが見えてくること」「デジタルとアナログそれぞれの良さを両立させること」など、今後実践する上で、参考となる考え方を学ぶことができました。また、所員の先生同士の実践や考えを交流することもでき、「笑顔の“もと”」を育む授業づくりにむけての心構えを新たにすることができました。

転入者の声

子どもは、保護者は、地域は、職員は、校長は

可児市立中部中学校　教頭　真野　純次

『教頭は職員室の担任』とは何度も聞いた言葉です。実際に職員室では、職員の様子がよく見える位置に座っています。この３ケ月でできたことは何か…校内を１日３周することを心がけ、生徒や先生方の頑張りを見つけ価値付けること、学校の様子をできる限り保護者に伝えていくこと、研究所と連携しながら学校保健会の運営を進めていったことでしょうか。中部中の校区は広い！学校だよりを配布するために地区センター６カ所を１時間半ほどかけて周りますが、まだまだ校区のことも分からない状態です。

慌ただしい毎日ですが、救われるのは、目の前に素敵な生徒達がいることです。姿を見て、想いを聞き感心し、生徒達から学ぶことが多いです。日々の成長を感じられることがやり甲斐であったことを、中部中学校で再認識しています。また、やる気に満ちた活気ある職員集団にも支えられています。中部中学校はありがたいことに教頭２人体制であり、分からないことは隣の小川教頭にすぐ聞くことができます。規模は違えども、幅広い校務を教頭一人で判断しながら整理していくことは大変だと感じているところです。

先日の教頭研修で「教育観」について話題になりました。私自身が先輩の先生方から学び大切にしてきたことは『あなたが大事』『子どもに軸足を置く』『迷ったら厳しい道を選べ⇔迷わず楽な道を嗅ぎ分けろ』です。学級経営、教科経営、後進の育成においてこのことを念頭に置いてきました。学校経営でも変わることはないでしょう。

生徒指導、不登校、地域連携、職員の働き方など、考えなければならない問題は山積みです。最終目標は「考え　力を合わせて　やり抜く　生徒」の育成。その中でも「なりたい自分」「あたたかいかかわり」をキーワードとした笠嶋校長の学校経営方針の具現のために、自分の強みを生かしてできることを考えています。職員の健康に気を配りながら、自らも笑顔で勤務できるように、山登りに、ZUMBA、剣道の地域指導など、余暇を楽しみながら、私が育った可児市に恩返しできればと思っています。

笑顔で子ども達の前に立つことの大切さ

可児市立今渡北小学校　教諭　市川　将也

「美濃加茂市」での勤務を経て、６年ぶりに「可児市」の教育に携わらさせていただくことになり、今渡北小学校（全校生徒９７１名、職員数５８名）という大規模な小学校で、その機会をいただきました。

新しい学校の文化に慣れることに追われ、怒涛のように駆け抜けた４・５月。これだけ多くの職員が、足並みを揃えて指導していくことの難しさを感じるとともに、自分自身も余裕がなく一日一日をこなしているという感覚で子ども達と向き合っていました。そんな中でも、学年の仲間や７年生の先生方に支えられ、学年を経営することができました。その過程で、先輩の先生のある言葉が胸に響きました。

「教育の最上位の目標は、人格の完成」
「何より、自分自身の心身の健康を保ち、
　　笑顔で子ども達の前に立つこと」

これまで、学年の仲間達と「働き方改革」として、取り組んできたことは意味あることだったのだと思えた瞬間でした。

- ねらいを明確にした活動の精選
- 教科担任制
- 児童一人一人を全員で見届ける職員の役割分担
- 放課後における教職員の時間の確保
- １７：００を目標とする退校時間
- 私生活の充実　　など

「教職員の働き方改革」こそ、先生の心身の健康を保ち、子ども達の「笑顔のもと」に直結するということ。それこそ今の教師に必要であると、私はこの今渡北小学校で改めて感じました。

子どもの為と信じ、身を削り研鑽を重ねる一生懸命な若い先生方がたくさんみえます。そんな先生方が笑顔で子ども達の前に立てるように、私を支え導いてくださった先輩の先生方への恩返しとして、私も若い先生方を支えていきたいです。そして、学校の教育目標「自律・尊重・協働」を実現し、児童も教職員も笑顔あふれる今渡北小学校を築けるよう、努めていきたいです。

令和６年度　教育実践論文募集

今年度も教育実践論文を募集します。

昭和５８年度から始まった教育実践論文の募集も今年度で４１回目となります。

日頃、可児市教職員の皆様が子どもの成長を願って、日々共に歩んでいる姿、教育活動の創意工夫を論文にしてみませんか。

多くの積極的な応募をお待ちしております。参考に昨年度の領域別応募数・入賞者を掲載します。

１　令和５年度実践論文応募状況

領域別	数	領域別	数
教科	14	学級経営	0
道徳	1	健康安全	1
特別活動	1	管理経営	6
特別支援教育	1	その他	0

２　令和５年度実践論文審査結果

職名・所属名は、５年度現在です。

☆　優秀賞（学番順）

纐纈　康暢	教諭	西可児中学校
三品　達也	教諭	西可児中学校
青木　裕介	教諭	西可児中学校
曽我　治寿	教諭	桜ケ丘小学校
梶原　楓也	教諭	今渡北小学校

☆　優良賞（学番順）

豊田　拓也	教諭	今渡南小学校
山田　真央	教諭	帷子　小学校
名倉　さおり	教諭	東明　小学校
福住　恵子	教諭	蘇南　中学校
石黒　智子	教頭	西可児中学校
長谷川　由奈	教諭	西可児中学校
大野　朝香	教諭	東可児中学校

☆　奨励賞　１２名

３　募集要項

(1) 目的

可児市学校教育課題の克服をめざした小学校、中学校の教職員の創意ある実践研究を広く募集し、もって実践意欲の喚起と指導力の向上を図る。

(2) 内容

① 小学校、中学校の園児、児童、生徒の指導および管理運営に関する実践研究であるもの

② 問題意識が明白で、仮説・実践・検証の過程が具体的かつ累積的で、一貫性のある実践研究であるもの

③ 他の公的機関に発表していないもの

(3) 執筆要領（要綱は、次の通りです）

① 使用言語　現代仮名遣いで書かれた日本語

② 使用ソフト　ワード、又は一太郎（様式は岐阜大学教育学部同窓会ＨＰダウンロード可能）

③ 本文の形式

Ａ４版**６ページ**（22 字程度×43 行～50 行×2 段横書き）余白　上下左右各 25 ㎜程度）

・1 ページ目の冒頭に研究主題・（副主題）・所属・職名・氏名を記載する（46 文字程度×5 行以内×1 段）。上下に二重罫線を引く。

・1 ページ目に「概要」（46 字程度×10 行）を記載する。（入賞者についてはこの「概要」をそのまま論文集に掲載）

・MS 明朝（見出しは MS ゴシック）

④ 写真・図・表の使用

写真は、全６頁で２枚程度（各写真の大きさは 11 文字×5 行以内）

図及び表は、全６頁で合わせて４点程度（各図・表は判読できる大きさとする。）

写真等は、「写真１」「図２」「表３」などのように一連番号を付し、簡単な説明を付ける。

⑤ 参考資料

本編以外の資料は添付しない。

⑥ 参考文献等

参考文献等がある場合は、論文の最後に年代順に一括掲載する。

⑦ その他

写真等は児童生徒が特定されないように留意する。

※詳しくは、「岐阜大学教育学部同窓会ＨＰ」参照

(4) 提出先　　可児市教育研究所

(5) 提出期限　令和７年１月９日（木）